

アクティブ・ラーニングの実践とその射程

—外国語教育と言語文化教育の2つの側面から—

中村典子

要旨

本稿の目的は、甲南大学で筆者が担当する外国語科目（フランス語）と言語文化科目（講義科目）の授業において実践しているアクティブ・ラーニングの方法とその狙いを説明し、学習効果と今後の課題について明らかにすることである。まず、外国語科目としてのフランス語の授業のなかで筆者が実践している内容、アクティブ・ラーニングの実施が難しい文法の授業についても言及し、次に、語学演習を含まない言語文化科目において、筆者が取り入れているアクティブ・ラーニングの内容と方法について説明する。最後に、言語文化科目に関する「独自の授業実態アンケート」の結果、受講生への個別インタビューによる聞き取り調査で得られたフィードバックをもとに、こうした実践の妥当性と教育効果について検討し、改善に向けた取組みについて述べる。特に講義科目である言語文化科目において、事前学習、授業の中でのアクティブ・ラーニングへの誘い、授業後の課題への取組みを通じて得た学習体験が、近い将来、社会人として活躍するための実践的能力につながると受講生が感じていることがわかった。

キーワード

アクティブ・ラーニング、外国語の授業、講義科目の授業、認知プロセスの外化、学習者中心、プロジェクト学習

目次

はじめに

I 外国語科目の授業におけるアクティブ・ラーニング

II 言語文化に関する講義科目の授業におけるアクティブ・ラーニング

III 言語文化科目に関する授業実態アンケート結果とインタビュー調査結果
結語にかえて

はじめに

「アクティブ・ラーニング」という言葉が大学教育において重要性を帯びるようになったのは、2012年の中央教育審議会（以後、「中教審」）の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(平成24年8月28日)がひとつの契機となっていると思われる。同答申の「求められる学士課程教育の質的転換」という項目の中で、大学教育において「学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」¹（下線は筆者による）と明記されている。小西²が指摘するように、高等教育で求められる学びのスタイルが大きく変化してきたと言ってよいだろう。2019年度以降、本学のシラバスでは、アクティブ・ラーニングの要素を含む授業の場合、その内容³を明らかにすることになっている。中教審が強調しているのは、従来型の知識伝達型の講義から、「教員と学生が意志疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場」⁴としての授業のあ

¹ 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(平成24年8月28日)、p.9。<https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>

² 本誌の小西幸男の「『共通基礎演習』におけるアクティブ・ラーニングの実践」を参照。

³ 文部科学省「令和2年度私立大学等改革総合支援授業」の要件（「2022年度シラバスガイドライン・マニュアル」による）にもとづき、本学のWebシラバスは、現在、アクティブ・ラーニングの内容に関して記載し、次の該当する項目にチェックを入れる方式になっている。【なし、PBL（課題解決型学習）、ディスカッション・ディベート、グループワーク、プレゼンテーション、実習・フィールドワーク、その他（授業方法に内容記載）】

⁴ 中央教育審議会答申(平成24年8月28日)、同上。

り方であり、ひとりひとりの学生の能力（認知的・倫理的・社会的）を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートが展開される双方向型講義や演習など⁵が求められている。本稿では、「アクティブ・ラーニング」（Active Learning）が何であるかという点について、溝上の次の定義に準拠する。

一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う⁶。

ここで注目しておきたいのは、単に「能動的」な学習態度が求められるのみならず、ある種の「活動」（書く・話す・発表する）への参加が求められること、そして、その活動内容を認知プロセスのなかで「外化」できることが必要である、という点である。「外化」（externalization）とは「内部で生じる認知過程を観察可能な形で外界に表すこと。発話、メモ、図、ジェスチャ、文章化、モデル化、シミュレーションなど多様な手段がある」⁷と定義されており、学生における「認知プロセスの外化」の発露は、外国語科目と講義科目では異なる点がある。そこで、本稿では、外国語科目と講義科目に区分して、認知の外化がどのように観察されうるかも考察したい。

まず、外国語科目としての語学演習を主とするフランス語の授業において、筆者がどのようにアクティブ・ラーニングを取り入れているのかを科目別に説明する。次に、語学演習を伴わない講義科目である3つの言語文化科目において実践しているアクティブ・ラーニングの方法を説明する。最後に、講義科目である言語文化科目⁸に関して、学生たちから得た「独自の授業実態アンケート

⁵ 同上。

⁶ 溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、p.7.

⁷ 三宅・白水「外化」in 日本認知科学会編（2002）『認知科学辞典』共立出版、p.105.

⁸ 学生たちとのやり取りやコミュニケーションが多く時間を占める語学演習とは異なる

ト」の結果について分析し、3人の学生への「個別インタビュー」の聞き取り調査で得られた内容、具体的には、アクティブ・ラーニングについての学生たちの率直な反応、筆者が実施した方法に関しての学生の受け止め方、改善が求められる事項など、学生からのフィードバックをもとに考察を進めた上で、実践方法の改善に向けた取組みについて述べる。

I 外国語科目の授業におけるアクティブ・ラーニング

大学での初修外国語である「基礎フランス語 I」のほか、「中級フランス語 III」、「上級フランス語 I」を筆者は10年以上前から担当しており、「French Studies I」は5年前から担当している。

(1) 「基礎フランス語 I」

「基礎フランス語 I」(文法)は、入門～初級レベルのフランス語の基礎的な文法の習得を目指す科目である。そのため、教授法としては、かつてヨーロッパで古典語(ラテン語・ギリシャ語)の教授に用いられてきた伝統的教授法の「文法・訳読教授法」(méthode grammaire-traduction)に傾きがちなが、これは知識の伝授が必要とされるからにほかならない。なお、本学では、日本語母語話者の教員が「基礎フランス語 I」(文法)の授業を週1回、フランス語母語話者の教員が「基礎フランス語 II」(コミュニケーション)の授業を週1回、それぞれ担当するカリキュラムとなっており、「基礎フランス語 I」の授業で学んだ文法知識を、「基礎フランス語 II」のコミュニケーションの授業で活用できるように、文法項目を同じ順序で配置して編集したオリジナル教科書二冊⁹を、全ての基礎クラスの共通教科書として採用している。また、「基礎フ

り、講義科目である言語文化科目については、約6年前から少しずつアクティブ・ラーニングを取り入れてきたものの、学生たちがどのような捉え方をしているのかが明確に把握できなかったため、今回、独自アンケートとインタビューは「言語文化科目」に限定して実施した。語学演習の外国語科目についても、今後、独自アンケートと学生インタビューを実施したいと考えている。

⁹本センターの複数の教員で編集した「基礎フランス語 I」「基礎フランス語 II」の共通教科書は以下の二冊である。E.E.F.L.E.U.K. [Équipe d'Enseignants de Français Langue Étrangère de l'Université Konan] (2013) 『新 Zéphyr フランス語文法の基礎』(早美出

ランス語 I」「基礎フランス語 II」の担当教員が連携し、学生たちの理解度や学習到達度を考慮した中身の濃い授業を目指せるように、毎回の授業の進捗を記入する Google Drive を活用した連絡ボードを 2013 年度から運用している。

「基礎フランス語 I と「基礎フランス語 II」の連携のため、Google Drive を活用したオンラインでの連絡ボードへの記入をお願いします。よろしくご協力ください。
<p>目的：1. 各々のクラスの進捗状況を明らかにする。 2. 同一クラスの担当者間で情報を共有する。</p> <p>方法：授業後、担当者が毎回の授業の内容と進捗を記入。</p> <p>効果：同一クラス担当者間の連携により、学生たちの理解度や学習到達度を考慮して、中身の濃い授業を目指す。</p>

出典：甲南大学国際言語文化センター「外国語 フランス語科目のガイドライン」¹⁰より

したがって、「基礎フランス語 I」では、基礎的な文法事項の理解と練習を進めて、応用問題なども解けるようにすることが目標となるため、習得した文法事項を具体的なコミュニケーション活動で用いる練習は、フランス語母語話者が担当する「基礎フランス語 II」の授業に委ねていると言えよう。こうした事情により、文法を学ぶ「基礎フランス語 I」の授業では、「知識の伝達・注入を中心とした授業」¹¹が主となり、アクティブ・ラーニングを取り入れようとする試みは容易ではない。

フランス語の文法クラスでのアクティブ・ラーニングを試みた先行研究としては、岩根の導入例¹²がある。反転授業に必要なビデオを iPad のアプリ

版社)、中村典子・ディディエ・シッシュ・安田晋也・ジャン＝ノエル・ボレ (2018) 『*Le français à la carte* アラカルトでフランス語!』(朝日出版社)

¹⁰ <<https://www.konan-u.ac.jp/kilc/study/fran/guideline.html>> (最終アクセス：2021 年 10 月 28 日)

¹¹ 中教審、前掲答申、p.9.

¹² 岩根久「フランス語初級文法クラスのプチ活性化—反転授業的活動の導入事例」、森朋子・溝上慎一編 (2017) 『アクティブラーニング型授業としての反転授業・実践編』ナ

Explain Everything を使って作成し、約 5 分間の動画「フランス語の動詞の法」の視聴と、確認テスト受験を授業前の事前課題としている。そして、対面授業では通常の授業の内容（復習小テスト、教員の解説）に加えて、30 分間のグループワークとして動詞の法と時制に関して数多くの問題を解く作業を課しておき、教員が解説しながら答え合わせをした後、各グループに正解数を報告させたり、間違った問題をグループごとに再考させたりした意欲的な試み¹³である。「グループワークにて共同で問題を解かせる」という発想は、アクティブ・ラーニングのひとつとしてよく用いられるが、文法の授業の中での導入は珍しく、大変興味深い。

グループワークによる共同作業については、欧州評議会（仏語：Conseil de l'Europe; 英語：Council of Europe）が数年をかけて編集後、2001 年に出版した CERCL（Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer）[英語での略称は CEFR¹⁴で、ここでは、日本で一般に使われている CEFR という表記を用いる]の中でも重視されている。CEFR は、「ヨーロッパ言語共通参照枠」とも呼ばれ、ヨーロッパ市民に対しての外国語学習の方向性を示したものである¹⁵。ヨーロッパ市民間の相互理解のための「複言語主義」(plurilinguisme) の促進、ヨーロッパにおける教育上・職業上の移動の奨励 (favoriser la mobilité éducative et professionnelle) が前提となっており、EU 域内の移動の自由、ERASMUS (European Region Action Scheme

カニシヤ出版、pp.127-137.

¹³ 意欲的な試みではあるが、約 5 分の動画の視聴、LMS 上の簡単な確認テストへの回答だけでは、事前学習が少ないようにも感じられる。

¹⁴ Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」

¹⁵ «Publié en 2001, il constitue **une approche totalement nouvelle qui a pour but de repenser les objectifs et les méthodes d'enseignement des langues** et, surtout, il fournit une base commune pour la conception **de programmes, de diplômes et de certificats**. En ce sens, il est susceptible de favoriser la mobilité éducative et professionnelle.» 出典：フランス国民教育省のサイト (<<https://eduscol.education.fr/1971/cadre-europeen-commun-de-reference-pour-les-langues-cecrl>>)

for the Mobility of University Students) に見られる EU 域内の大学間交換留学制度を推進している。そのため、コミュニケーション・アプローチ¹⁶を中心とした「日常会話」にとどまらず、母語が異なる人々と協働して作業や仕事を行い、問題を解決することを念頭に置く教授法「行動主義的アプローチ」(perspective actionnelle) が推奨されている¹⁷。

初級文法を扱う「基礎フランス語 I」のクラスでは、筆者は、対面授業では文法事項の解説を行った後、毎週必ず課題を出し、翌週に答え合わせをするスタイルを取っており、特にアクティブ・ラーニングと言える作業は実施してこなかった。ところが、2020 年度からのコロナ禍のなか、外国語の基礎科目はすべて、前期・後期の各 15 回のうち 5 回のみが対面授業となり、残りの 10 回は Web 活用授業となった（ソーシャル・ディスタンスを確保できる教室にて授業を実施するためにローテーション方式で教室を使用）。その結果、Web 活用授業においては従来と異なるスタイルを取り入れることにした。授業時間 90 分間のうち、最初の 20 分間を「個別学習」とし、Web 上で公開されているフランス語母語話者（あるいは英語話者のフランス語教員）の動画（主として YouTube）を閲覧させたり、フランス語のシャンソンを使ったクイズなどを取り入れ、教科書の音源を利用した練習問題なども解かせる。その後の 70 分間は Zoom で「リアルタイム遠隔授業」を実施している。フランス語の文法を解説した YouTube の動画には、間違いも散見されるため、どこが間違っているのか学生たちと一緒に考えたり、Web 上のさまざまなコンテンツ（無料の仏英辞典、音源付きの仏仏辞典、便利な動詞活用表など）やアプリなども Zoom にて使い方を紹介した。学生たちの自律学習の際のツールとなっているようだ。Zoom での授業の終わりには、全員に 3 つの表現で挨拶をする習慣¹⁸

¹⁶ コミュニカティブ・アプローチとアクティブ・ラーニングの関係については稿を改めたい。

¹⁷ CEFR, フランス語版 pp.15-19.

¹⁸ 具体的には、Merci. / Au revoir. / Bonne soirée. / Bon week-end. / À bientôt! などのうちから、3 つの表現を各自が発音したのち Zoom を退室する練習である。フランス語母語話者が「挨拶は 1 語では寂しいので 3 つの表現を選んで言ってください」と説明する

を身につけてもらうこともできた。また、Web 活用授業のもう一つの利点は、Web 上での課題提出という条件のもと、パソコンやスマートフォンで「フランス語の特殊文字をタイプ打ちできる」ように指導できたことである。本学の LMS(Learning Management System)である My KONAN に参考資料を提示した後、Zoom での授業で画面共有の機能を利用して詳しく説明した。その結果、クラスの全員が難なくフランス語を打てるようになったと思われる。Zoom での授業の際に当てられた学生は、Word で作成した自分の解答を積極的に画面共有で提示するようになり、IT 能力の向上にもつながっている。学生たちが社会に出た際には、フランス語の特殊文字を PC 等で打つことが求められると推察されるため、コロナ禍によって引き起こされたマイナスの状況をプラスに変えることができた一例だと考えている。

正規の授業時間中ではないが、アクティブ・ラーニングを取り入れるために、基礎の文法クラスの学生たちに提案した自由課題がある。反転授業の変形と言えるかもしれない。夏休みの自由課題として、自分で取った写真を利用してフランス語の教材を PPT でつくり、ナレーションを入れて、MP4 に変換後、YouTube で限定公開してクラスで閲覧する、という試みである。筆者の例を示して、基礎クラスと中級クラス、それぞれのレベルでの製作を推奨したが、現時点では提出した学生はいない。来年度に期待したい。

(2)「中級フランス語 III」

「中級フランス語 III」(実用フランス語)では、実用フランス語技能検定試験(仏検)などの語学の資格取得を目指す学生たち向けに、中級文法の習得、資格試験に向けた聴解問題、書取問題(dictée)に重点を置いている。さて、中級レベル以上の場合には、「行動主義的アプローチ」を促すことが比較的容易だと言えよう。例年、後期の11月後半から、「シャンソンのグループ発表」

動画を見せた後、学生たちは全員、嬉々として3つの表現のフランス語で挨拶をするようになった。フランス語母語話者の適切な動画が学習意欲を喚起する一例である。

という初歩的な「プロジェクト学習」を実施している。2～3人のグループでフランス語のシャンソンを選び、歌詞を調べた後、部分書取（dictée partielle）の問題を1人2問ずつ作成してもらう。発表の際には、問題作成者が教壇に立ち、他の学生に当てたり、自分が作成した問題の解説を行う。グループ発表のための準備作業は、歌詞のプリント作成を含め、授業時間外に自律的に行うため、主体的なアクティブ・ラーニングとして、また、グループ学習として、学生たちにも好評である。

（3）「上級フランス語Ⅰ」

「上級フランス語Ⅰ」（リーディング+実用フランス語）の授業では、教材として作成されたのではない、生のフランス語資料（documents authentiques）を用いて、上級レベルの文法説明、さまざまな検定試験の紹介も行っている。今年度は、「英語とフランス語を比較しながら学びたい」という学生たちの希望があり、英語母語話者向けのフランス語の教材を一部取り入れた。前期・後期とも試験は実施せず、「プロジェクト学習」¹⁹を中心として授業を構成していることが特徴である。前期は、フランス語圏の映画に関するプレゼンテーションをフランス語で行う。学生がフランス語のみで作成したPPT²⁰について、教員が語学上の大きなミスなどを修正した後、学生は、フランス語でナレーションをPPTに吹き込み、音声の入りのPPTファイルを課題として提出する。7月の授業中には各学生のナレーション入りPPTファイルを紹介するが、PPTの中に「映画の予告編を使ったフランス語のクイズ」を入れることが条件となっており、そのクイズに関してクラス全体でディスカッションを行う。後期に

¹⁹ 上級クラスになると、受講している学生間の語学力にばらつきがあるため、正解がひとつしかないような試験を中心に授業を進めると、外国語学習に対するモチベーションを削ぐことになると筆者は考えている。各自の語学レベルに合わせて自律的に外国語運用能力を養成できるような課題（プロジェクト学習）を提供することが適切であると思う。

²⁰ シラバスにはPPTではなくKeynoteとなっているが、ナレーションを入れる作業を、学生が自宅でするようにPPTに変更した。

は、各自が関心をもっている分野や事柄に関して、インターネット上のフランス語の情報などを利用して、20分間のフランス語の授業を組み立ててもらう。授業用の資料についての教員のチェックを経た後、各学生は教壇に立ち、「模擬授業」を実施するという「プロジェクト学習」である。学生たちは、思った以上に時間をかけて自分の授業資料を作り上げる。教員は、学生たちの作成した資料（PPTとWord文書）を事前にチェックし、間違いがあれば修正するという役割を担っている。上級クラスまでフランス語を継続している学生たちは外国語習得についての意識が高く、熱心に学ぼうとする姿勢が窺えるため、高度なアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れることができる。このような「プロジェクト学習」では、認知プロセスの「外化」が高いレベルで明確に示されていると言えよう。

「上級フランス語 I」（2020）のシラバスの一部

授業方法	<p>iPadを活用したiCALL教室にて、各自のレベルに合った聞き取りテスト、グループワークを取り入れるほか、前期・後期とも、各自がプレゼンテーションを行い、アクティブラーニングを実施する。</p> <p>1) 映画のシナリオ教科書に沿って中級文法を徹底的に復習し、比較的易しい問題を数多く解き、語彙を増やす。各自のレベルに合った問題に取り組めるように工夫する。</p> <p>2) 仏検受験者のために、聞き取り問題を中心として過去問題を解き、仏検対策を行う。希望者には、過去問題のプリントを配布する。</p> <p>3) 年間4回程度、小テストとして dictée を実施する。</p> <p>・前期は、iPad およびPC上でのフランス語の扱い方などをマスターし、各自がフランス映画に関する発表をiPadのKeynoteを使ってプレゼンテーションする。その後、平易なフランス語でディスカッションを行う。</p> <p>・後期は、インターネット上のフランス語の情報等を活用して、各自がコンテンツと問題を作成し、PPTを使って「20分間のフランス語の授業」を教壇に立つて行う。</p> <p>≪フィードバックについて≫ dictée と課題については、実施後、担当教員が個別にフィードバックを行う。</p>
アクティブ・ラーニングの内容	PBL（課題解決型学習）／プレゼンテーション／その他（授業方法に内容記載）
定期試験	実施しない
成績評価	<p>前期・後期とも定期試験は実施しない。</p> <p><前期> 平常点（50％）：課題への対応、Webを活用した授業への積極的関与度などから算出 個別発表（50％）：PPTによるプレゼンテーション（ナレーション入り）</p> <p><後期> 平常点（50％）：dictée の点数、授業への積極的関与度、仏検の結果などから算出 個別発表（50％）：「20分間のフランス語の授業」の実践</p>

（4）「French Studies I」

比較的新しい科目の「French Studies I」は、1年次の後期に受講する学生が

多い「留学支援科目」である。この授業では教科書は用いず、主として3つのタスクをこなすことで成績評価している。第1のタスクは「カフェでの注文」に関する sketch（寸劇）である。カフェで用いるさまざまな表現を学んだ後、バリのカフェのメニュー（実物）のコピーを渡し、2～3人のグループにてカフェでの会話を作って書いてもらい、教員が添削する。その後、会話のミニ台本を暗記してきて、その場면을演じてもらうのである。エプロン、トレイ、コーヒーカップや皿などの小道具は教員が準備する。学生たちが sketch を演じる際には、教員が iPad で録画を行い、後日、本人たちに録画したのを見せることもある。笑い声が聞こえ、陽気な雰囲気のなかで学習が進む段階である。第2のタスクは、フランス語圏への旅行計画を立てるタスクだが、コロナ禍のせいで、このタスクは多少実施しにくくなってしまった。2020年以前は、飛行機のチケット、ホテルの予約、観光名所やレストランなどをフランス語のサイトで調べてもらい、すべて実在する便やホテルなどをもとに計画を立ててもらっていたが、コロナ禍では、架空の部分があってもよしとしている²¹。各自の発表は PPT を使い、フランス語での簡単な説明をナレーションとして吹き込む「プロジェクト学習」をこの科目でも実施している。その際、1年生向けの定型表現を中心として構文を組み立てるように指導している。第3のタスクでは、「第2のタスクとして計画を立てたフランス語圏への旅行を実現した」と仮定し、過去形で記した旅行日記を口頭で発表する（過去形の文章は、事前に教員が添削しておく）。各自、iPad のアプリなどを使ってしっかり発音練習を行った上で、明解な発音にて旅行日記の発表をしてもらう。このようなタスクを中心とした授業においては、文法の授業とは異なり、初級レベルであっても学生たちの個性が発揮される場があるため、クラスメートが仲良くなりやすく、皆、楽しそうに作業や発表に取り組んでいる。

²¹ コロナ禍においては、飛行機の便数が極端に少なくなり、ホテルが通常営業していない場合もある。

「French StudiesI」(2020)のシラバスの一部

定期試験	実施しない
成績評価	定期試験は行わない。 平常点(40%)と3つの課題(20%×3)で評価する。 *平常点(40%)は、授業への積極的関与度、授業中の課題への対応を加味して算出する。 *3つの課題(20%×3)：グループ別の会話実践、個別プレゼンテーション、個別発表
教科書	適宜、資料をMyKONANの授業資料にアップする。また、対面授業ではプリントを配布する。

なお、2019年度に1年次でこの科目を受講した学生の半数が、フランス語を上級クラスまで継続して学習し、仏検だけでなく、フランス国民教育省が認定している資格試験 DELF・DALF に向けて自律的に学習している。外国語の授業においては、教科書で決められた範囲を淡々と学ぶのではなく、自由な雰囲気の中でクラスメートと共同作業を行ったり、プレゼンや口頭発表を通じて、学生ひとりひとりの個性が発揮される場を創出することこそがアクティブ・ラーニングの極意ではないかと筆者は考える。「タスク学習」「プロジェクト学習」の一環として、ペアまたはグループで作業をさせること、個別に口頭発表に向けて準備を進めさせることは、学習者のモチベーションの向上に役立っているようだ。さまざまな形でのアクティブ・ラーニングを取り入れることにより、外国語科目の授業の充実を図る必要があると筆者には感じられる。

さて、溝上のアクティブ・ラーニングの定義に沿って、外国語科目の授業の中で、「活動」(書く・話す・発表する)への関与がなされ、その活動内容が、認知プロセスのなかで「外化」できているかどうかについて確認しておきたい。外化とは「内部で生じる認知過程を観察可能な形で外界に表すこと。発話、メモ、図、ジェスチャ、文章化、モデル化、シミュレーションなど多様な手段がある」²²であった。「中級フランス語 III」における「シャンソンのグループ発表」は、フランス語の音声を文字化する問題をグループで作成する、という作業であるため、発話・メモといったレベルを超えて、主体的な作問ということができよう。また、「上級フランス語 I」における前期の課題、映画についてのフランス語での発表(フランス語のナレーション入り PPT)は、①数

²² 三宅・白水「外化」in 日本認知科学会編(2002)『認知科学辞典』共立出版、p.105.

多くの映画の中から、学習者が主体的に作品を選び、②映画に関するフランス語の総合サイト（フランス語母語話者向け）²³にあるシノプシスのフランス語を音読した後、日本語で要約し、③予告編を利用してフランス語のクイズを作成した後、④フランス語で感想を述べる、という多様な要素が入っており、複合的なレベルでのアクティブ・ラーニングだと考えられる。後期には、自分が関心を持った分野について、フランス語の資料を用いてフランス語の模擬授業を行うために、かなりの準備が求められ、総合的なフランス語の力が必要であるのみならず、学習者の熱意、作業に関する緻密さなども加わって、学習者の個性と能力が発揮される「プロジェクト学習」である。それゆえ、「上級フランス語 I」の授業は、「戦略的なアクティブラーニング型授業」²⁴となっており、「ディープ・アクティブ・ラーニング(DAL)」に分類されるであろう。

以上、語学演習を伴う外国語科目の授業について述べた。中級・上級レベルでは積極的にアクティブ・ラーニングを取り入れることができているが、基礎レベルにおける授業中のアクティブ・ラーニングの実践については、今後の課題としたい。

II 言語文化に関する講義科目におけるアクティブ・ラーニング

ここでは、語学演習を含まない講義科目（いずれも半期科目）を扱う。まず、受講生が 150～250 人の「国際理解 A」、次に理系の学生が受講し、15 回のうち 8 回は理系研究者をゲストとして招聘している「世界のサイエンス事情 II」、そして、フランス語履修者が受講する、フランス語圏の社会と文化に関する科目「言語と文化 フランス II」におけるアクティブ・ラーニングについて記述する。

(1) 「国際理解 A」

²³ ALLOCINE <<https://www.allocine.fr/>>

²⁴ 松井佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、p.47.

この科目は、「国際言語文化科目」コースを選択した学生向けに開講され、その概要は、シラバスに次のように記載してある。「ヨーロッパ、特にフランスの場合を端緒として、世界のエネルギー事情、食料事情（食糧事情）について理解を深める。また、いくつかの国における人々の「働き方」に焦点を当て、人々の働き方やメンタリティーの違い、文化や宗教の違いについても考察する。その上で、人々の移動に伴う多文化共生社会の可能性と問題点、グローバル時代における日本の役割を考える。」この講義では、地球全体の問題として考察すべきエネルギー事情や食料事情を扱うだけではなく、学生にとって身近な問題である「働き方」についても考えてもらう。日本と海外の「働き方」の違いについては、特に学生の関心が高いように思われる。実は、この講義科目は2019年度まで大教室にて対面授業で行っていたため、授業中の私語やスマートフォンの使用について注意しなければならない場面が多々あった。2020年度以降は、コロナ禍のなか、大人数の授業は全15回すべてがWeb活用授業と指定されている。2021年度のシラバスの一部は以下の通りである。

「国際理解 A」(2021)のシラバスの一部

【授業構成】

【原則として、前半はオンデマンド型（資料を閲覧して学習する）、後半はリアルタイム遠隔型という形式でWEB授業を行うため、授業開始時間にMyKONANにアクセスしてください】

第1回 地球環境を考える
 第2回 世界のエネルギー問題（1）
 第3回 世界のエネルギー問題（2）
 第4回 世界で人々はどのような働き方をしているのか？（1）
 第5回 世界で人々はどのような働き方をしているのか？（2）
 ＊プレゼンテーションのテーマを提示

[20210510修正：第6回と第7回の内容が逆の順序になっていたため、修正しました]

第6回 世界の食料問題（1）
 ＊プレゼンテーションファイルの作成の仕方、テーマの決め方について説明する。

【個人プレゼン・ファイルの提出〆切日：6月29日（火）23時】

第7回 観光通訳の仕事と国際理解 [5月25日]<90分間Zoomを利用>
 ●ゲストスピーカー：.....氏（全国通訳案内士：英語・フランス語）

第8回 世界の食料問題（2）

[20210510修正：第9回と第10回の内容が逆の順序になっていたため、修正しました]

第9回 グローバリゼーションが引き起こす問題
 第10回 劇場芸術を通しての国際理解～演劇、アートマネージメントの仕事～ [6月15日] <90分間Zoomを利用>
 ●ゲストスピーカー：.....氏（演劇教育専門員）

第11回 反グローバリゼーションの波
 第12回 「風習・習慣・考え方の違い」と異文化理解
 第13回 「多文化主義」を考える
 第14回 国籍と移住をめぐる問題

【個人レポートの提出〆切日：7月13日（火）23時】

第15回 多文化共生社会に向けて

<p>授業方法</p>	<p>COVID-19の影響により、この講義は、全期間「Webを活用した授業」を実施します。受講者は、授業の日程・時間帯に合わせて毎回MyKONANにアクセスしてください。この科目の「クラスプロフィール」をクリックし、「授業資料」を確認してください。</p>
	<p>【重要】原則として、授業時間の前半はオンデマンド型（資料を閲覧して学習する）で学んでもらい、授業時間の後半はZoomによるリアルタイム遠隔型でWEB授業を行うため、授業開始時刻にMyKONANにアクセスしてください。</p> <p>・国際社会が直面している重要なテーマについて、映像資料、統計資料、関連するニュースなどを解説しながら講義を進める。 ・授業で解説した内容、一般常識や国際的な時事問題等に関して「小テスト」を頻繁に実施することで、受講者の理解度を確認しながら授業を進める。</p> <p>★WEBを活用した授業では、受講者が授業資料、デジタルコンテンツ、動画の内容を、どの程度理解しているのかを把握することが重要となってくる。そのため、ほぼ毎回「小テスト」を実施する予定である。 ★ゲストスピーカーを招いた際は「小さな課題」を出す予定である（全2回）。受講者が記入した内容や意見に関して、適宜フィードバックを行う。 ★第7回目の授業で提示する資料を参考にして、各自、発表する国とテーマを選んでナレーション入りのプレゼンテーション・ファイルを提出すること。《優秀な提出物をリアルタイム遠隔授業の際に紹介する予定》 ★授業で扱ったテーマに関して、複数のドキュメンタリー映画、関連する書物を紹介するので、各自ひとつ選び、鑑賞または読了すること。その上で、所定の用紙を使って設問に答える形の個人レポートを提出する。【課題として全員必須】</p>
<p>アクティブ・ラーニングの内容</p>	<p>ディスカッション、ディベート/プレゼンテーション/反転授業</p>

定期試験	実施しない
成績評価	定期試験は実施せず、以下の配分で成績評価を行う。 ・「小テスト」(全10回)による理解度の算出(40%) ・「小さな課題」(全2回)への対応(20%) ・個人のプレゼンテーション用ファイル提出(20%) ・個人レポート(20%)

異なる2つの分野からゲストスピーカーを1回ずつ招聘しているが、その2回は学生たちの出席率が高く、Zoomでの授業であっても積極的に質問する学生がいて、ディスカッションが展開される。それ以外の回は、基本的に「オンデマンド型での資料と動画の閲覧による個別学習」を40分程度、その後、Zoomでの授業にて、教員が解説を加えるとともに、質疑応答の時間となる。ここで特筆しておきたいのは、質問をする学生には「加点する」システム²⁵を採用していることである。科目の内容によっては、学生からの質問を積極的に受ける必要がない場合もあるが、この章で扱う3つの講義科目では、学ぶべき内容が厳格に固定されてはならず、シラバスに沿って時事的な問題や学生が興味を抱いた点を中心に授業を展開することによって、学生の学びを深めることを目標としている。これは、認知プロセスの「外化」とも関係すると筆者は考えている。この授業で行った主なアクティブ・ラーニングとしての課題は、個人のプレゼンテーション用ファイル提出(20%)と個人レポート(20%)である。各々の課題に関する学生たちの反応は第3章で扱う。

(2)「世界のサイエンス事情II」

この科目は、「国際言語文化科目」コースの「理系国際言語文化コース(Dコース)」を選択した学生向けに開講され、その概要は、シラバスに次のように記載してある。「主として第2外国語圏(ドイツ語圏・フランス語圏・中国語圏・韓国語圏)の科学技術に関して著名な研究機関・研究所等について知見

²⁵ 具体的には、1回の質問(または発言)につき、2点を加点している。ただし、質問や発言について、LMSから「質問(または発言)内容についての簡単な報告メモ」を提出した場合に限り、加点対象としている。3日以内に報告がない場合は加点は行わない。こうした一連の作業は、学生が将来、社会人となったときに役立つと考えている。

を得ると同時に、各国・地域の重要な産業や科学事情、ノーベル賞受賞等の著名な科学者についても理解を深める。必要に応じて、各国・地域に住む人々の生活習慣や考え方、メンタリティーについても説明する。また、最先端の研究について、ゲストスピーカーの方に分かりやすく説明していただき、自分の学科以外の分野についても基礎的な知識を得る。」この科目は、2016年度から開講されている「理系国際言語文化科目 (D コース)」の選択科目のひとつで、グローバル化社会の中で理系の学生として知っておくことが望ましい一般的な教養を身につけるほか、ゲストスピーカーとして招聘する理系の専門家の先生方や研究者から、海外での研究や学会活動に関係する話、外国語学習への取り組み方などについても語っていただく授業である。受講者には、ゲストスピーカーに (日本語または英語で) 質問してもらうことを奨励し、課題としての個別プレゼンテーション、グループ別プレゼンテーションの際に PPT のファイルを使って 30 人程度のクラスで話す機会があることも明記している。2021 年度のシラバスの一部は以下の通りである。

「世界のサイエンス事情 II」(2021)のシラバスの一部

<p>授業方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・理系の学生に必要な一般教養を身に付け、世界の各国・地域の制度や考え方について理解を深め、毎回、質疑応答や意見交換を行うほか、個別プレゼンテーション、グループ別プレゼンテーションなどアクティブ・ラーニングを取り入れる。 ・個別プレゼンテーション、小レポート (英語で書き、LOFT等でネイティブ教員のチェックを受けたものを提出すること)、グループワークの成果としてのグループ別プレゼンテーションについては、その都度、担当教員がフィードバックを行う。 ・理系の先生方や海外で研究生活を送ってきた専門家をゲストスピーカーとして招聘し、21世紀に科学を学ぶ上で必要な姿勢や考え方について薫陶を受けると同時に、海外における研究の進め方や学会事情等についても知る。 ・理系の学生として外国語とどのように向き合っていけばいいのかについても、それぞれのゲストスピーカーからお話を伺う。
<p>アクティブ・ラーニングの内容</p>	<p>ディスカッション、ディベート/グループワーク/プレゼンテーション</p>
<p>定期試験</p>	<p>実施しない</p>
<p>成績評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平常点を40% (授業への積極的関与度、学習カルテへの記載事項、ゲストスピーカーを招聘した際の質問やリフレクション・ペーパーなどから算出) として評価する。 ・個別プレゼンテーションを20%、小レポート (英語で書き、LOFT等でネイティブ教員のチェックを受けたものを提出) を20%、グループ別プレゼンテーションを20%として評価する。
<p>教科書</p>	<p>教科書は用いず、授業に必要な資料は、MyKONANの「授業資料」で配布する。</p>

この授業でのアクティブ・ラーニングとしての課題は、個別プレゼンテーション（20%で成績評価に入れる）とグループ別プレゼンテーション（同 20%）である。コロナ禍になってからは、上記で扱った他の科目同様、個人プレゼンテーションの PPT にはナレーションを吹き込んでもらっている。1 年次の学生にとっては初めての試みであるようで、完成した際の達成感は大きいと見受けられる。これについても 3 章で扱う。なお、受講生の中には、ゲストスピーカーの話に熱心に聞き、適切な質問をする学生がいる一方で、ほとんど発言しない学生もいる。質問することにより加点すると明言してあるが、講義をきちんと聞いていない学生や消極的な学生は、質問したり発言することが少ない。今後、何らかの方法により改善を促したい点である。

（3）「言語と文化 フランス II」

この科目は、「国際言語文化科目」コースの「国際文化コース」にてフランス語を履修している学生のために開講している科目であるが、学部・キャンパス間での学びにおける「融合」が推進される中、フランス語を履修していない理系学部の学生が受講していることもある。授業の概要欄には、以下の内容を記載している。「フランスの教育制度をはじめとして、フランスのさまざまな社会制度について、理念と基本的な仕組みを理解する。また、フランスに関する最新のニュース映像や資料を活用して、フランス人のメンタリティーや価値観を探る。フランスの制度と比較するために、北米や他のヨーロッパの国々の教育制度、社会制度等についても資料や映像などを交えて紹介した後、グループでのディスカッションを行う。フランス式の小論文（dissertation）の書き方を詳しく解説し、受講者に実践してもらおう。グループ別発表と個人レポートについては、ともに dissertation 形式に則って実施してもらおうことになる。また、それぞれの採点も、dissertation 形式に則っているかどうかを重視した採点となる。」この章で扱っている他の科目以上に、本学の複数のキャンパスからさまざまな学部の学生が受講している科目でもある。2021 年度は、コロナ禍の関係もあり、2 回を除いては Web 活用授業としての開講となった。2021 年度のシラバスの一部は以下の通りである。

「言語と文化 フランス II」(2021)のシラバスの一部

<p>授業方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ COVID-19の影響により、この講義は「Webを活用した授業」となる予定です（ただし、後期になって、急遽、対面授業が可能となれば、対面授業への変更もあります）。 【Webを活用した授業の進め方】 ・ 受講者は、授業の日程・時間帯に合わせて毎回MyKONANにアクセスしてください。この科目の「クラスプロファイル」をクリックし、「授業資料」を確認してください。 ・ 原則として、授業の前半は「授業資料」欄に提示された資料や動画などを閲覧して考えてをまとめてもらいます。授業の後半は、Zoomによるリアルタイム遠隔授業にて、教員の説明、グループでのディスカッションや質疑応答を行います。 ★以下は対面授業で行っていた内容です。Web活用授業の場合は、適宜、変更を加えて実施します。 ・ 授業は、講義形式の部分と、グループ毎にディスカッションしてグループの意見をまとめ、報告してもらったアクティブ・ラーニングの部分という2つの部分から構成される。 ・ 「映像や資料から何が読み取れるか」「日本と異なる点はどこか」「日本人が参考にする点は何か」等を考えてもらい、毎回、最後の15分間で意見交換とディスカッションを行う。 ・ 「学習記録・質問カルテ」の用紙を毎回配り、記入してもらってから回収する【Web活用授業の場合は、毎回の「課題」として回収する予定】。教員は「学習記録・質問カルテ」を毎回チェックし、出された質問に対しては、できるだけ授業の中で取り上げて回答する予定。 ・ グループワークの成果としての「フランスの小論文形式でのグループ別・口頭発表」については、良い点、悪い点について詳しくフィードバックを行うので、最後の課題である「個人レポート」を作成する際、参考にしてもらいたい。 ・ 個人レポートは、添削・採点の上、レポート本紙を返却してフィードバックを行う。
<p>アクティブ・ラーニングの内容</p>	<p>ディスカッション、ディベート/グループワーク/プレゼンテーション</p>
<p>準備学習</p>	<p>・ My Konanの「授業資料」欄で提示された資料やリンク、参考資料としてのPDF等に、授業後、よく目を通し、次回のディスカッションや質問につなげてください。また、出された課題は、期限内に対応してください。（1日30分程度）</p>
<p>必要となる知識</p>	<p>該当なし。</p>
<p>授業構成</p>	<p>第1回 フランス、カナダ・フランス語圏の現在 第2回 日仏比較：フランス人の衣食住に対する考え方、個人主義 第3回 フランスの教育制度、アメリカの教育制度 第4回 バカロレア（大学入学資格試験）、フランスの大学と学生生活 第5回 フランス式の小論文の書き方（1） 第6回 フランス式の小論文の書き方（2） *グループ別発表のテーマ開示 第7回 フランス式の小論文の書き方（3） 第8回 フランスの結婚制度とPACS、家族制度 *グループ別発表の順序開示 第9回 フランスの労働環境とバカンス、フランスでの Le client est roi. は本当か？ 【個人レポートのテーマ開示】 第10回 フランスの社会保障制度（RSA、子供手当、学生への住居手当）と税金、<グループ別発表①> 第11回 フランスの食文化、<グループ別発表②> 第12回 社会における弱者への対応、<グループ別発表③> 第13回 移民とフランス、フランスの国籍要件「生地主義」、<グループ別発表④> 【重要：個人レポート（フランス式の小論文）の〆切：12/24(金)18時】 第14回 フランス文化と日本文化の違いについて考える<ゲストスピーカー招聘予定> 第15回 EUの中のフランス、フランス社会から私たちが学べること【個人レポートの返却】</p>

定期試験	実施しない
成績評価	<p>授業への積極的関与度（授業中の質問や発言、「学習記録・質問カルテ」から算出する）30%、グループ別の口頭発表20%、個人レポート50%の配分で評価する。</p> <p>★個人レポートは、【たとえWeb活用授業であっても】指定のレポート用紙を受け取り、ペンで書いて、中村研究室に提出してください。</p> <p>★最終回の授業の前後で、添削・採点したレポートを、直接、本人に返却する予定です。</p>
教科書	<p>講義に関連する資料、グループ別発表、個人レポートの内容や締切日については、My Konanの「授業資料」の項目にUPするので、適宜、確認すること。</p> <p>★必要に応じて、資料や指定のレポート用紙を、中村研究室の前のボックスを介して配布する予定です、</p>

この授業でのアクティブ・ラーニングとしての課題は、グループ別の口頭発表（20%で成績評価に入れる）、個人レポート（同 50%）であり、10 年前から変化していない。この授業の目的のひとつが、フランス式の小論文（dissertation）の書き方を受講者に体得してもらい、今後、レポートや卒業論文、社会に出てからの報告等に活用してもらうことである。また、特筆すべき点として、「言語と文化 フランスI」でフランス史を担当しているフランス語母語話者のシッシュ教授に、年に 3~4 回、授業に入っただき、フランス人教員の立場から、学生のグループ発表が dissertation の形式になっているかどうかについて改善点などを指摘していただいている。シッシュ教授と筆者の指摘を受けた上で、各学生は年末の個人レポートを dissertation の形式で書いて提出する。また、授業中にグループでミニ・ディスカッションをしてもらうことにも重点を置いている。さらに、2021 年度からは、毎回 10 分程度のグループ・ディスカッションを Zoom のブレイクアウトセッションにて実施し、グループで話し合った内容を代表者に簡潔に報告してもらうようにした。これは 3 章で言及するインタビュー調査からのフィードバックのおかげであるが、自分の意見をダイレクトに発表するのではなく、3~4 人のグループ・ディスカッションで話した内容の概略を報告してもらう、というワンクッション置いた仕組みにすることによって、学生たちの反応がよくなったと感じている。

III 言語文化科目に関する授業実態アンケート結果とインタビュー調査結果

ここでは、3つの講義科目のうち、2020 年度「国際理解 A」の授業を例に

とってアクティブ・ラーニングの検証を進めたい。当該授業終了後に LMS（My KONAN）上で実施した 2020 年の独自アンケートの結果を示しながら、アクティブ・ラーニングに対する学生たちの反応や意見について紹介する。また、個別インタビューに応じてくれた 3 人の学生から得たフィードバックをどのように活用できるかについて述べる。

（1）授業改善のための独自の授業実態アンケートの分析

講義科目「国際理解 A」の 15 回の授業の終了後、課題の量、学んでよかったと思う内容などについて、授業実態に関する学生の反応を知り、今後の授業改善につなげる目的でオンラインで実施した無記名アンケートがある。この結果から、いくつかの項目を示し、どのようなアクティブ・ラーニングが実際に実現できたのかを考えたい。

来年度の「国際理解A」の授業を構成する上で参考にしたいので、回答してください。（全7問です）

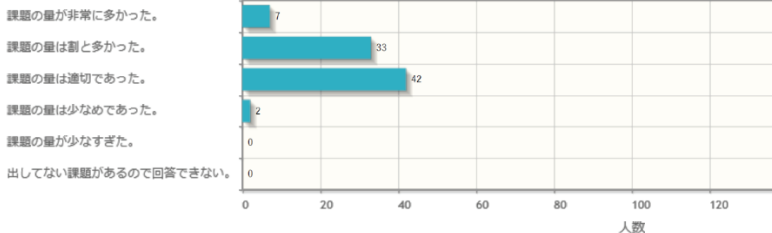
アンケート実施期間：2020/07/21(火) 20:52 ~ 2020/07/31(金) 23:59

対象者数：139名 回答者数：84名 回答率：60.4%

グラフの表示形式一括変更

集計結果

1. 「国際理解」（火4限）の授業の課題について回答してください。

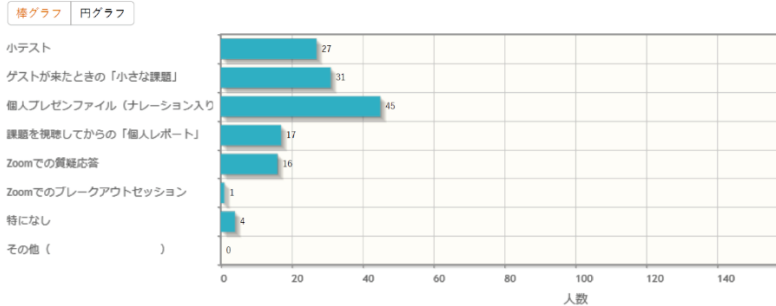


設問 1 に関するグラフは、課題の量についての学生の感じ方である。教員としては、*〆*切が厳格に決められている²⁶多種類の課題を出したが、学生たちは

²⁶ LMS から提出のため、締切を過ぎると次のどの課題も提出できない仕組みとなっている

コツコツと真面目に課題に取り組んでくれたようで「課題の量は適切であった」(42人)が一番多かったという結果は嬉しい。学生は授業に参加した上で、毎回、期間内に課題に取り組む必要があったため、欠席してしまった場合は、その分の点数を取り戻すのが難しい。

2. 以下の項目のうちで、自分のためになったと思うものを選んでください(複数回答可)。

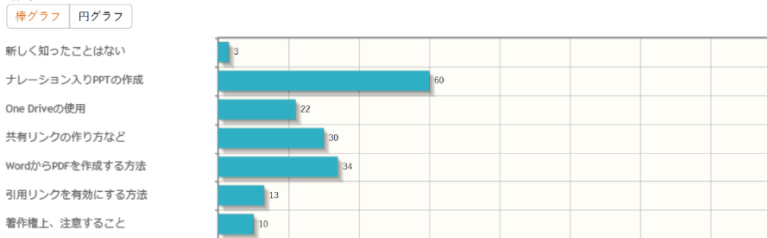


設問2に関するグラフからは、学生が「自分のためになった」と感じている課題が示されている。複数回答可であるが、「Zoomでの質疑応答」が良かったという回答(16人)も少なくなかった。課題を提出できなかった時や欠席した場合などは、「質問による加点」を狙うことができる仕組みにしているが、学生の受け止め方は、筆者が考えていたほど単純ではなかった。加点されるとはいえ、150人ほどのZoomでの授業で「学年・学部・氏名を明らかにしたうえで質問や意見の表明をする」ことについては躊躇があるようだ。アンケートの間7で「皆さんが、多くの人の前でも質問したり、発言できるように、どのような条件を整えればいいでしょうか?『自分が質問してもよい』という状況について自由に書いてください」と聞いたところ、自由記述回答には次のような意見があった。「学年・氏名を言わなくて良いなら質問がしやすい」(5人)

る。授業後4日以内に受けるオンライン「小テスト」(10回)、2つの「小さな課題」、2つの大きな課題として「ナレーション入りPPT」「ドキュメンタリー映画を鑑賞した上で設問に答える個人レポート」である。

「人前で発表できるようにするためには、グループ・ディスカッションのような少数人数での練習から始めてほしい」（2人）「グループの意見を代表して言う形なら発言できると思う」（2人）などである。ただ、次のような厳しい意見もあった。「質問をしない人は、『こんな質問してもいいのかな？』や『そもそも何を質問すればいいの？』『質問とか面倒だし、誰かがやってくれるからいいや』といった心理だと思う。このような人たちに質問してもらうには、かなり荒療治になるが、質問を単位修得の必須条件にしたり、教員の側から学生数名を指定し、次の講義で質問をさせる等、強制的な手段を用いる必要があると私は考えている。これだと受動的な講義となってしまう、アクティブ・ラーニングの本旨の能動的な学習からは少し離れてしまうが、質問の経験のない人に『質問してね！』『何でも聞いてね！』と何度呼び掛けても、結局同じ人が質問するだけで、質問の数は一向に増えないと思う。」こうした学生の意見を踏まえて、今後、Zoom での授業においては、グループでディスカッションを行い、グループで話し合ったことを報告してもらう形式をより多く取り入れた。2020年度、2021年度に2回ずつは取り入れてきたが、約150人の受講生を対象に、毎回ブレイクアウトセッションを設定し、管理するのは容易ではなかった。今後は何らかの解決策を検討したい。

4. 個人プレゼンファイルを作成して提出するまでの作業で「今回、初めてできるようになってよかった」と思える項目はどれですか（複数回答可）。

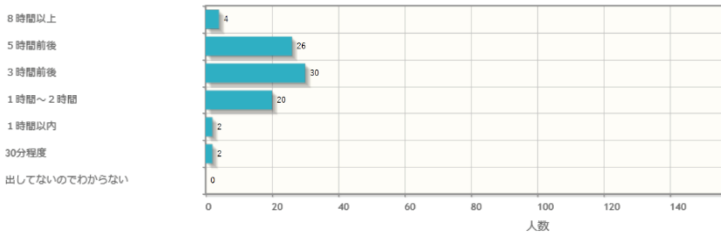


設問4に関するグラフは、個人プレゼンファイル（PPT）の作成に関して、受講生が「今回、初めてできるようになってよかった」と思える項目を示している。授業外でのアクティブ・ラーニングとして、「ナレーション入りのPPT

の作成」ができるようになったことを評価してくれた学生（60人）が多いことがわかった。

3. 個人プレゼンファイルの作成には、総合して、どのくらい時間がかかりましたか？

棒グラフ 円グラフ



設問3に関するグラフは、個人プレゼンファイルの作成にかかった時間を示している。1時間以内に作成した受講生も数名いるが、8時間以上かけた学生もいる。ナレーション入りPPTはスライド5枚を標準としているが、スライドを10枚ほど使用し、ナレーションをつけた力作もいくつかあった。こうした課題を遂行するためには、松井が挙げている「振り返る」「仮説を立てる」「原理と関連づける」といった動詞を用いた、高次の認知機能²⁷を用いた学習と作業が不可欠である。それゆえ、こうした課題は紛れもなく「ディープ・アクティブ・ラーニング」(DAL)である。以下に、受講生に示したこの課題の概要を挙げておく。

²⁷ 松井佳代 (2015)、前掲書、pp.46-47.

【国際理解 A：個人プレゼンファイル（ナレーション入り）に入れる内容】

必須事項＋テーマ 1～10 のうちひとつ

以下の項目から選んで、ファイルに番号を入れておいてください。

必須事項：その国を選んだ理由＋その国の位置、人口、言語、特筆すべき歴史について

1. その国の経済状況や主たる産業や貿易などについて
2. その国のエネルギー政策と問題点
3. 働き方の特徴、労働時間や有給休暇について
4. その国の食料事情・食料自給率
5. その国の軍事的位置や徴兵制があるかどうかなど
6. その国の宗教や風習にかかわる事項
7. 市民の平等に関する事項（男女差別、LGBT 差別があるかどうかなど）
8. その国の医療制度について
9. 教育制度、特に大学入試の仕組みや学費等について
10. その国の移民政策、海外からの労働者の受け入れについて

学生たちが、申請した「選択した国・地域＋上記のいずれかのテーマ」の組み合わせ²⁸に合わせて提出した個人プレゼンファイルの中から、優秀なプレゼンファイル 10 個ほどを 3 回にわたって Zoom での授業の際に匿名で紹介した。ナレーション入りのため、非常にわかりやすかったと思う。それに対する学生たちの反応を示しておきたい。

設問 5 「この授業で初めて知った内容や実施した学習で『意外と知識になる』『楽しかった』と思う事項があれば、その項目を書いてください。」に対して、以下のような自由記述での回答があった。「色々な人のプレゼンを聞けて、自分もこういう風にすれば良かったなと思える部分を見つけることが出来てよかったです」「他の人のプレゼンを聞いたこと」「他の人の意見を聞けて為になり

²⁸ 約 150 人学生について「国・地域＋テーマ」の組み合わせが重ならないように、LMS のある機能を使用して希望を申請させ、申請順に決定した。

ました」「数多くの学生が講義に参加しており、様々な価値観に触れることができ、貴重な時間であった」「全体的に新しく知ることばかりで興味深かった」²⁹などが主な意見である。教師冥利に尽きる回答をもらったと感じている。学生の深い学びと IT 能力の向上に期するため、さらにディープなアクティブ・ラーニング型授業を目指して授業をデザインしていきたい。

(2) 個別インタビューによる聞き取り調査からのフィードバック

「国際理解 A」「世界のサイエンス事情 II」「言語と文化 フランス II」の三科目のうち、複数の科目を受講した3人の理系学生に個別インタビューによる聞き取り調査を実施することができた。

²⁹ 非常に長いが、興味深い記述があったので、以下に引用する。「普段あまり新聞を読んだりニュースを見ず、Twitter でたまたま見かけた情報くらいしか知らない。情報不足だったので、授業を通して強制的に多方面の国際問題について知ることができて、知識が増えたような気がした。また、レポート課題のために普段は見ないようなドキュメンタリー映画を観ることになり、初めは2時間もあるのか、と思っていたが、見始めると自分の知らなかった事が沢山あって、日本の教育制度や労働基準など、考えさせられることも多く、興味深かった。」

個別インタビューの結果一覧表：

【記号説明：◎：アクティブ・ラーニングを行った。△：特にアクティブ・ラーニングはなかった。／：受講していない。】

学年	a)国際理解 A	b)世界のサイ エンス事情 II	c)言語と文化 フランス II	改善を希望する点
学生 A 2年	◎	◎	◎	a)と c) に関して：いきなり個人の意見を言うのではなく、まず、グループ・ディスカッションをし、その後、グループの意見をまとめて発表する形式を望む。 b)に関して：ゲストスピーカーの講義を2つに分けてほしい。集中力が途切れるから。
学生 B 3年	/	◎	◎	b)に関して：ゲストスピーカーの講義を前半と後半に分けてほしい。より熱心に講義を聞けると思う。また、後半の前に、考えるべき内容やクイズを提示してほしい。 c) に関して：dissertation 形式での発表とレポート作成を行う際、論じる内容の中に「フランスの例」「ヨーロッパの例」を入れて比較するような条件をつけるとよいと思う。フランス文化に接するよい機会なので、dissertation の形式以外のことも取り入れるようにすると、皆、自分でいろいろと調べると思う。
学生 C 4年	◎	◎	/	a)に関して：グループ・ディスカッションをもっと取り入れてほしい。いろいろな学生と出会って「人間理解」を進めたいから。それがグローバル化社会でも役立つと感じられる。

インタビュー調査に応じてくれた3人の学生は、いずれも積極的に授業に参

加した優秀な学生であり、学生 B と学生 C は、クラスで毎回質問をしてくれた学生でもある。質問に関していえば、学生 A が改善を望む点（グループ・ディスカッションをしてから、グループの意見や質問を代表が報告する）は非常に重要であると思う。多くの学生が、いきなり人前で質問や意見の表明をするのは難しいので、少人数のグループで意見交換をした後、グループの代表として発言することを望んでいることがよく理解できた。そうした形式を積み重ねることにより、必要なときに自ら意見を表明できるようになると思われる。早速、今年度からこうしたステップアップ方式を取り入れ、10 分間ほどのグループ・ディスカッションをできる限り取り入れるように努めている。また、授業の内容や進め方についても有益なフィードバックを3人の学生からもらった。その結果、次のように進めたいと考えている。「世界のサイエンス事情 II」においては、ゲストスピーカーの講義（約1時間）の途中で、考えるテーマやクイズをゲストから出していただき、学生たちの集中力が切れないような仕組みにする。「言語と文化 フランス II」においては、フランス式小論文（dissertation）の形式を練習する際に、フランスやヨーロッパでどのようになっているのかを、学生たち自身に調べてもらう、ということである。優秀な学生たちからの提案は、教員にとって非常に貴重であると思う。今後の改善点として、シラバスにも反映させる予定である。具体的には、特に、「国際理解 A」のような100人を超えるクラスであっても、円滑にグループ・ディスカッションを行えるようなブレイクアウトセッションの組み方、あるいは他の方法を使ってグループをあらかじめ決めておくほうがいいのかなど、いくつかの方法を次年度、試してみたいと考えている。そのほかの点については、すでに少しずつ改善を始めている。

なお、個別インタビューの結果一覧表にも一部記載したが、学生たちは3人とも、筆者の授業を受講し、授業前の準備、授業中でのアクティブ・ラーニング、授業後の課題への取り組みを通じて得た学習体験が、グローバル化社会において社会人として活躍するための実践的能力につながると感じている、という感想を述べてくれたことを最後に記しておきたい。

以上、学生たちからの率直な意見が聞けるインタビュー調査があつてこそ判

明した事項である。

結語にかえて

以上、まず、外国語科目としてのフランス語の授業におけるアクティブ・ラーニングについて科目別に説明したが、その際、上級レベルでは、「ディープ・アクティブ・ラーニング」の域に達していることがわかった。次に、講義科目である3つの言語文化科目におけるアクティブ・ラーニングの方法を、特に「国際理解 A」を中心として説明した。この科目においても、「ディープ・アクティブ・ラーニング」を学生たちが行ったと言えるだろう。最後に、講義科目である言語文化科目³⁰に関して、学生たちから得た「独自の授業実態アンケート」の結果について分析し、3人の学生への「個別インタビュー」の聞き取り調査で得られた内容、特に改善すべき点について3人の率直な意見を得ることができた。今後、具体的な実践方法の改善を進めたい。

* インタビュー聞き取り調査に協力してくれた3人の学生に心より感謝します。

³⁰ 学生たちとのやり取りやコミュニケーションが多く時間を占める語学演習とは異なり、講義科目である言語文化科目については、約6年前から少しずつアクティブ・ラーニングを取り入れてきたものの、学生たちがどのような捉え方をしているのかが明確ではなかったため、今回、独自アンケートとインタビューは「言語文化科目」に限定して実施した。語学演習の外国語科目についても、今後、独自アンケートと学生インタビューを実施したいと考えている。